HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「COVID-19とTourism Studies」研究会報告と論点の整理
Author(s)	石野, 隆美
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 17, 14-22
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83066
Type	bulletin (other)
File Information	Sauvage17_2_1r.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【COVID-19 禍における院生の研究・調査活動の今】

「COVID-19 と Tourism Studies」研究会報告と論点の整理

石野　隆美
立教大学大学院観光学研究科 観光学専攻 博士課程後期課程
takayoshi1207@gmail.com

1. はじめに――プラットフォームと研究会の組織にあたって

新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」）の感染者が世界で初めて確認されてから、すでに 1 年以上の月日が流れている。私たちはいまだにこの事態を現在形で語らなければならないが、一方で、過去形で語る日が来る前になしておくべきことはまだ数多く残されている。Facebook のグループ機能を用いた情報交換プラットフォーム「COVID-19 と Tourism Studies」は、観光研究に携わる若手研究者や大学院生による大学を越えた議論の場を設け、今日の事態を冷静に把握し共有していくと同時に、それを過去・現在・未来の観光（研究）のあり方にひもづけて検討していく場として、2020 年 4 月 12 日に発足された。

このプラットフォームには、観光研究を行う大学院生らの交流とネットワーキングの場としての意味合いが強く込められている。筆者を含め、感染症の影響によって海外渡航や調査のための移動が困難となり、研究計画の遂行に足踏みを迫られている者は少なくないと思われる。また、筆者の所属する研究科では、2020 年度に入学した修士課程 1 年次の院生の多くが、入学後半年近くもの間、院生室や図書館に行かなかった（行けなかった）という。講義やゼミもオンライン上で行われるため、いまだに同期の大学院生や指導教授に対面したことがない者もいる。このように大学院生間の交流の機会が大きく損なわれているなかで、生活や研究上の不安について共有したり、議論を交わしたり、互いを刺激し合ったりする交流の基盤を準備することには一定の意義があるものと思われた。

本稿の執筆時（2021 年 1 月）段階で、グループには趣旨に賛同してくれた大学院生や若手研究者、教員ら計 38 名のメンバーが集い、グループ上での情報交換や定期的な研究会の開催がなされてきた。グループには年齢や所属にかかわらず誰でも参加することができる。そして研究会はプラットフォームの名を取り「COVID-19 と Tourism Studies 研究会」として組織され、1・2 か月に一度の頻度で開催されてきた。この研究会においても、議論のみならず参加者間の交流の機会としても場を意味づけるために、発表と質疑応答・議論を行う「第 1 部」（1 時間）と、近況報告や情報交換を行う「第 2 部」（1 時間）という構成で各回が進められた。

本稿は、学外の院生による寄稿と特集への参加を快諾してくれた北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の院生論集の場を借りて [1]、本プラットフォームの場で開催されてきた研究会の各発表について振り返り、交わされた議論を記録に残そうとするものである。本稿が研究会に参加できなかった人びとの目にも触れ、さらなる議論の喚起につながれば幸いである。

2. 研究会の概要

「COVID-19 と Tourism Studies 研究会」は、2020 年 5 月から 10 月にかけて計 6 回、断続的に実施されてきた。以下に、これまでの各回の話題提供者とタイトルを順に挙げる（敬称略）。その後、各回の報告の概要について、報告後になされたディスカッションでの論点や筆者の視点を交えて再構成しつつ紹介していきたい [2]。

5 月 24 日「健康と観光、そしてモラリティ――体温検査と問診にみるバイオセキュリティと移動」（石野隆美）
6 月 7 日「アフターコロナの故郷観光」（鈴木里奈）
6 月 14 日「新型コロナ禍の外出しない観光をめぐる一試論」（二ツ山達朗）
8 月 9 日「移動・観光体験による資本獲得の可能性に関して考察する――若者のバックパック旅行を事例に」（萬代伸哉）
8 月 23 日「移動による食生活の変化について――日本における Uber Eats と中国における Meituan を事例に」（李娜）
10 月 24 日「ホーム／アウェイのゆらぎ――コロナから考える現代の観光経験」（鍋倉咲希）

初回となった石野報告では、COVID-19 が世界的な流行をみせた当初期からユヴァル・ノア・ハラリやジョルジョ・アガンベンらがさかんに議論していた「監視」をめぐる問題を整理しながら、その問題設定の内部に存在するアポリアを指摘した。まず石野は、移動する人々（もちろん観光者も含まれる）がその皮膚や体温において識別され把握されるプロセスとしての検温やサーモグラフィの導入に着目し、移動者（観光者）の「健康」がかつてなく問題化されている現状を確認した。赤外線サーモグラフィは 2003 年の SARS 発生を契機として空港に導入された。それまでは主に工業用途に利用されていたが、空港での体表温度測定によって感染者を判別し隔離する水際対策に必要不可欠なものとして、以降世界的に導入されている。また今日では、個々人が日々、自らの体温や健康状態を把握し管理する自己モニタリングが要請されてもいる [3]。移動する身体を一切の漏れなく捕捉するサーモグラフィと、個々人に自らの健康を常に管理するよう迫る種々の要請は、「生権力」（Foucault 2004=2007）的な監視のあり方を想起させる。体温検査の場で一定以上の数値が表示されたり、公の場で咳込んでいたりすると公共交通機関や店舗の利用が制限されかねない現状を鑑みるならば、たしかに人びとの健康が「法的義務」のように扱われ、監視権力が整備されていく側面を強調すること [4] や、「監視技術の恒常化」[5] の問題に結びつけて事態を論じることには一定の妥当性があるようにみえなくもない。

しかし、感染症対策の現実的な遂行に対して生権力の批判を持ち出すと、議論は公衆衛生と安全をめぐる「正義」の壁に直面してしまう。今日、逐一の体温検査や感染者の隔離、そして濃厚接触者の追跡と捕捉は、「社会的距離（social distancing）」の確保と並んで COVID-19 に対する現実的かつ有効な施策と考えられている。監視や管理を問題化する生権力的な視点は、そうした現実問題としての感染対策の基盤を揺さぶるものであり、「それでは適切な感染症対策を放棄して感染が拡大してもよいのか？」といった反駁を招くものとなりうる。かといってその「正義」を手放しに評価することは、身体へと介入する生権力とその恒常化へのリスクに対する批判性をも手放すことになってしまう。アガンベンやノア・ハラリの議論は、ともすればこうした袋小路に行き着いてしまう危険性がある。

石野は、COVID-19 の感染症状況下において観光者を分析し描きだそうとする際に、移動する身体（あるいは観光する身体）を集団化する生権力的なまなざしを分析者が注意深く避けていく必要があると指摘する。つまり、匿名的な個人の集団としての観光者を描くのではなく、その集団を構成する個々人がそれぞれの個別具体的な「顔」を有し、彼らの行為や判断の背景にはいくつもの文脈や迷いのプロセスがありうることについて、想像力を働かせることが重要だと述べる。なぜなら、観光者を匿名集団化する生権力的なまなざしは、今日に問題化している観光者への道徳的なバッシング

の問題の正当化に加担しうる危険性を有しているためである。移動する身体は、感染症対策の文脈においてはウイルスを運ぶリスクと重ねされ、体温や健康状態といった断片的な情報へと変換されていく。またその過程では、その身体がどこで何をなし、誰と接触したのかという行為と結果のみが重視され計測される（濃厚接触者追跡はたしかに追跡対象を具体的個人として扱うものの、行為とその結果がデータとして価値づけされる点に変わりはない）。こうして、個々人がその行為にいたった理由や判断のプロセスが不可視化されていくことで、人びとは自己責任論の標的となるのである[6]。集団としての人の移動を管理するまなざしを、分析者として内面化することがはらむ危険について議論が投じられた。

鈴木報告では、故郷を訪れる観光において人びとに経験される特殊な「場所性」――すなわち特定の空間と人びととの結びつきが生み出す空間感覚やアイデンティティ、記憶の共有といった諸作用と関係の総体――の分析をてがかりに、身体的な移動を伴わない「バーチャル観光」や、長距離移動を避ける「近隣観光」であっても観光者が一定の「真正」な体験やアイデンティティ構築に到達しうる可能性について模索された。まず鈴木は、北海道空知地方の炭鉱遺産を事例として、かつて炭鉱町で生活していた人びとが故郷の炭鉱遺産を再訪してまわる移動が、帰郷と観光双方の特徴を内包する重層的な移動、いわば「帰郷観光」と呼びうるものであると論じる。人びとは自らが炭鉱町で生活していた時代の記憶や歴史、あるいは時の経過を実感するために帰郷観光に臨む。だが興味深いことに、「帰郷する観光者」たちは実際に生活したことのない（ともすれば一度も足を運んでいない）炭鉱町をも自らの故郷のごとく訪れ、懐かしさの感受や自己のルーツの再確認を行うという。炭鉱施設の外見の類似性と語られる当時の生活状況の共通点に触発されながら、帰郷観光者が自らの記憶の束を開かれたものへと変換していくこの過程において、特定の「地域」や「場所」は代替可能な要素として後景化される。鈴木はこうした分析をもとに、自らの記憶とアイデンティティが共有され構築されていく舞台としての場所性は、帰郷観光の文脈においては特定の場所や地理的空間から離脱した、想像的で流動的なものとしてあらわれていると考察するのである。

もし仮に、自らの故郷や直接的な所縁のない場所であっても人びとが場所性をつむぎ、アイデンティティを確認したり、充足感を獲得したりすることが可能だとするならば、今日において新しく（あるいは再び）生まれつつある「近隣観光」や「バーチャル観光」といった観光形態もまた、人びとのアイデンティティの形成や創発的な共有感覚をもたらす可能性をもっているのではないか――たとえ遠くの、あるいは特定の個別具体的な目的地に実際に行くことができないとしても――。このように鈴木は、帰郷観光が厳密な意味での故郷を目的地としなくとも作動する点に着目し、移動の物理的な制約や限定性がある観光であっても、従来の観光が有していた（かもしれない）異化の作用や変化の経験を観光者にもたらす可能性があることを示唆する[7]。

二ツ山の報告は、まさにそうした「外出しない観光」に着目し、身体的な移動を伴わない観光がいかなる「ツーリズム・モビリティーズ」（遠藤 2017；cf. Urry 2007=2015）を現出させているのかを分析したものである。2020年4月7日に7都道府県に緊急事態宣言が発せられて以降、「不要不急の外出自粛要請」のかけ声は全国で今なお繰り返し叫ばれている。そうして日常生活圏から遠く離れた移動や観光を気軽に行うことが難しい状況が続くなか、旅行会社や地方自治体、観光関連施設からは「バーチャル観光」や「オンラインツアー」といった新たな観光移動の仕組みがつくられてきた[8]。こうしたツアーは、参加者・視聴者がZoom等のアプリケーションを介して画面の向こうのガイドや現地の人々と交流したり、事前に宅配された現地の料

理や特産品を食べながら現地の生産者とライブ動画でつながったりすることを通じて、自宅にいながらも身体的に「旅のリアリティ」を体験できるよう組織化されている特徴をもつ[9]。

他方で、観光産業側による動きに加えて観光者側も 4 月の緊急事態宣言下では新たな動きを一部で見せてきた。二ツ山が注目したのは、「旅行気分」というインスタグラムのハッシュタグ（#）の盛り上がりである。そこではあらゆる行為が「旅行気分」という言葉・タグと結びつけられることで、「旅」や「旅行」、「観光」の概念が人びとによって拡張されたり代替されたりしている様子を見て取ることができる。観光地の食材を自宅で食べたり現地の動画を見たりすることは、COVID-19 以前にも当然あっただろう。そうした行為が今日の状況下で敢えて「自宅旅」や「旅行気分」として再認識される背景には何があるのだろうか。

「バーチャル観光」や「オンラインツアー」が、参加者に本物らしい「観光」を体験させるべくしてその本質が抽出され、再現されたものだとすれば、SNS の「旅行気分」の投稿は対照的に、人びと自身がその本質を拡張し、身体的な移動や体験がなくとも成立するような「観光」の範疇を新たに定めようとする動きとみなしうる。だが同時に、交差するこれらの動きには、身体的・物理的な移動が制限されるなかでもモノや情報、観念や感覚、技術を移動させることによって「旅」的・「観光」的な体験を再現／創出しようとする、共通した意志を見いだすこともできる。これらの点は、身体的・物理的な移動が観光において重要な要素であったことを示しているが、同時に、それが多々ある観光の構成要素の 1 つに過ぎないことを暗示しているようにも思えてならない。

身体的な移動、そして旅先での「新たな出会い」やハプニング（偶発性）の経験への希求は、まさにバックパック旅行がその特徴とするところでもある。若者のバックパッカーが旅へと駆り出される理由と動機についてブルデュー的な意味での「資本」概念をてがかりに分析をなした萬代報告では、バックパッカーに通底する 5 つの価値観の存在――「学び」「非日常」「主体性」「経験」「語り」[10]――が示されると同時に、これらの価値観が実はオンラインツアーやバーチャル観光においても希求される要素でもあることが議論された。従来よりも予算にこだわらず、テクノロジーに囲まれながらより短い旅行期間で移動を繰り返す「フラッシュパッカー」（Javis and Peel 2010）の増加が観察されてきた一方で、（そうした技術や画一化されたガイドブックの力を借りつつも）自らの力で物事を決定し成長していくような「主体性」は、依然としてバックパッカーに必須な資格であると考えられている。また、「非日常」的な空間で様々な出来事を「経験」し、それを自らの社会的な「学び」へと結びつけながら、最終的にはそれを他者へと「語る」ことによって体験を再解釈していくという一連のプロセスは、「旅」をめぐる言説において容易に観察されるものである。だが、と萬代が問いかけるのは、移動の体験がそうして社会的に価値あるものとして準備されていく過程に存在しうる、ある種の統治の可能性である。自身が主体的で能動的な選択をすることができている、と旅人に信じ込ませるようなシステムが実は作動しているのではないか。そもそもそうした「前進主義」的な旅の価値づけのサイクルに参入できる者は一部に限られているのではないか（cf. 大野 2012）。そして、COVID-19 の状況下でバックパック旅行の遂行自体が難しくなったとき、彼らはいかにその経験と資本の蓄積のサイクルを維持しようとするのだろうか。

自己形成に関わる体験の蓄積を継続させる方法は、おそらくオンライン上であっても模索されていくことだろう。たとえば筆者が分析のために参加したオンライン対談「世界を旅したスペシャリストが語るこれからの旅について」（2020 年 6 月 13 日、株

式会社ビジョン主催 [11]）では、緊急事態宣言をはじめとした外出・移動制限下でも可能な旅のスタイル（近場での観光や、人混みを避けた避暑地周遊、少人数でのドライブ旅など）が模索されるとともに、オンライン上での情報収集や情報交換に積極的に取り組むことで「いずれ行ける旅」への準備を怠らないことや、オンライン上で体験できる旅に積極的に参加することの重要性が盛んに議論されていた。こうして「旅」の価値自体が再生産されていくプロセスを観察していると、ではバーチャル観光のようなオンライン独自の体験を、参加者はいかに自身の資本へと転化――つまりそれを本来的な「旅」の経験へと回収――していくのかという点が問われてくる。「プロトラベラー」はバーチャル観光をいかに旅として語るのか（あるいは語らないのか）。またその過程で、オンラインとリアル、あるいはデータと身体といったかたちで容易く据えられてきたあの対置はいかに 1 つの経験へと接合されたり、取捨選択されたりしていくのか。バックパッカーを事例とした萬代の報告では、このように旅の経験の本質に迫る議論が投げかけられていたように思う。

COVID-19 と感染症対策の文脈において移動をめぐる変化が見いだされるのは、もちろん旅や観光に限られない。李の報告は、外出自粛等の移動制限下で普及をみせたフードデリバリーサービスの分析を通じて、食をめぐる移動から観光移動を捉えかえすことを試みたものである。まず李は、「新型コロナによる食生活と健康に対する意識調査」[12] のデータをもとに、移動制限は人びとの外食を減少させ、代わりに内食（家庭内で料理をつくり、家庭内で食べること）と中食（市販の弁当やテイクアウト食品を持ち帰り、家庭内で食べること）の割合の増加をもたらしたと指摘する。また、フードデリバリーサービスの普及に伴い、中食や内食の増加は仮に「アフター・コロナ」なる時期が到来したとしても継続されうると分析する。

外食のための移動が、外出自粛や移動の制限下で減少したことは 1 つの事実であろう。だが、そのことは食をめぐるモビリティの減少や消失を意味しない。外食のためにレストランや飲食店に足を運ぶ機会は減ったかもしれないが、代わりにテイクアウトのために店に向かうことや、家庭内での料理のためにスーパーなどへ買い出しに行く機会は増えている可能性がある。またなによりも、フードデリバリーサービスが、食を運ぶ配達員の移動をこれまで以上に増幅させていることは疑いえない。外出移動の代わりに食材や第三者の配達員の移動が増加し、かつそうしたサービスを利用可能にするためのアプリケーションの流通が加速するとともに、インターネット上でレシピや食材に関する情報もまた頻繁に交換されるようになってきている。食をめぐるモビリティの改編である。

李の議論を敷衍して導くことのできる重要な推論はおそらく、モビリティとはつねに一定の総体として現出しているものでありうること、そしてその総体の内部の配分（または配置）がさまざまに変更されているという捉え方が重要だということである。この総体には、移動物も不動物も、そして移動を可能にするソフト的な仕組みもまた含まれる。移動の消失や減少というのは、その総体の一側面を切り取る操作があってはじめて成立する現象に過ぎない可能性がある。モビリティはつねに、その複雑な増減や拡大・縮小のダイナミズムのなかで捉える必要があるだろう。

だがここで急いで付け加えるべきは、そうしたモビリティの「全体」を私たちが見渡すことはおそらく不可能だということである。言い換えれば、移動は相対的なものであることを忘れてはならない。特定の移動物を捉え、そのモビリティを描き出そうとするなら、私たちは当然その移動物の周囲に存在する不動物もまた描く必要がある。だが、そこで描かれた不動物は、あくまで当初の移動物との関係においては不動であるが、他の存在との関係においては移動している可能性がありうる [13]。この意味で移

動の総体とはつねに open-ended なものである。

しかしながら、COVID-19 の感染拡大防止措置の文脈では様々な「境界」が存在感をもって立ちあらわれていたこともまた議論すべきである。水際対策としての国境封鎖や、「県外ナンバーお断り」「ステイホーム」といった言説、そして最もミクロな自他の境界としてのマスク。鍋倉による報告では、今日こうして様々なスケールで「ホーム」と「アウェイ」の境界が輪郭づけられていくなかで、「ホーム」がいかなる存在として私たちに経験されているのかが議論された。とくに鍋倉が注目するのは、帰属する場所であり安全性を感じられるような「ホーム」空間が、窮屈で居心地の悪い「アウェイ」の空間へと変質したり、その双方の感覚が連続的に体験されたりするような境界の「ゆらぎ」のプロセスである。そもそも、「ホーム」はエスニシティやジェンダーをめぐる暴力性をはらんでいたり（小ケ谷 2020：89-90）、また近代家族概念を社会構成の前提とするような排外性の象徴であったりすることが指摘されるような[14]、なかなかやっかいな概念である[15]。

鍋倉は、そうした複雑な「ホーム」のありようについて、海外の日本人向けゲストハウスに集まる人びとの現象学的な経験をひもとくことで分析していく。海外にある日本人向けゲストハウスは、大きくみれば海外で日本人と交流し落ち着きを得ることができる「ホーム」的な空間である。だがゲストハウスは人の流動性も高く、滞在者は数日スパンで次々と入れ替わっていくため、滞在者はその時一緒にいる人びととの相性に応じて、場を居心地よく感じたり、あるいは嫌気を感じたりするという。様々な都合によって日本を離れた人びとが第 2 の故郷（ホーム）のように日本人向けゲストハウスを価値づけ、スタッフやオーナーと家族のようにふるまう者もいれば、そうした緊密で家族的な人間関係に戸惑う者もいるなど、ゲストハウスの空間は「ホーム」と「アウェイ」が万華鏡のように入れ替わるのである。こうした転換性や、同時に複数の経験の様式が混在することを踏まえれば、「ホーム／アウェイ」あるいは「日常／非日常」の二項対立的な思考は有効性を失う。「ホーム」が特定のイデオロギーや権力と結びついているものだとすればなおさら、「アウェイ」のなかに「ホーム」的なものが顔を出したり、それらがせめぎ合ったりするプロセスの中身を丁寧に読み解いていく作業が必要になると、鍋倉の議論は示唆している。

見方を変えれば、鍋倉が注目するのは滞在という時間的かつ行為的なプロセスである。人びとが交流し、役割や演技を遂行し、なんらかの経験を獲得していくプロセスには、ゲストハウスという場での滞在の経験、すなわち「いる」という経験が根本的に関わっている。鍋倉は、観光における「みること」（cf. Urry and Larsen 2011=2014）、「すること」（行為やパフォーマンス）に加えて、「いること」もまた今日の観光の重要な要素となっているのではないかと指摘するのである。この視座は、COVID-19 の状況下で生起している移動と観光の変容の問題に直結するものだといえよう（たとえば「バーチャル観光」において「観光地にいる」とはどのような経験であり、それはどのようにして成立するのだろうか）。

以上、計 6 回におよんだ研究会では、個々の発表者の事例や土台とする理論的視座の多様性から、ディスカッションもまた多岐にわたった。傾向としては、COVID-19 とその感染対策がもたらす観光への影響や、「バーチャル観光」や「オンライン観光」における技術的機構と観光のさらなる結びつきについての議論が活発であったように思われる。また、観光という現象が人々の移動や集合、接触を不可避に生じさせうることを念頭に置いたときに、私たちは観光の可能性や危険性をどのような倫理的価値観のもとで対象化すればよいのか、といった議論も投げかけられた。

3. おわりに――現在形で考える

COVID-19は本稿執筆時点（2021年1月）においても進行中の事態でありつづけており、今後も状況の変化に応じて様々な論点が新たに生まれていくことだろう。この状況下、「経済を回す」ものの筆頭になぜ「観光」が位置づけられるのか。なぜこれほどまで観光が人々に希求されているのか。マイクロ・ツーリズムや親しい者との観光であれば問題ない、という言説にみいだされている「安心」や「安全」の意識はいかに根拠づけられているのか。また、それはそれ以外の観光的行為とどの程度区別されているのか。COIVD-19 と感染症対策はいかなる「観光へのまなざし」を生み出しているのか。すでに問われるべき課題は数多くあるように思われる。

COVID-19 と Tourism Studies の活動はこれ以降も研究会やグループでの交流をもとに継続していくが、これまでもこれからもおそらく、そうした問いの数々に「決着」をつけることを目指すものではない。私たちはいまだ現在形で語らねばならないが、それは悲観すべきことではない。現在形で語るということは、事態をつねに進行中のものとして捉え、次に出てくる変化とその分析の可能性を開かれたままに維持する構えでもあるだろう。「ウィズ・コロナ」という言い方に込められるべき意味が何かあるとすれば、それは上述のような事柄ではないかと筆者は考えている。

以上が研究会活動の報告である。今後も、筆者は周囲の多くの手を借りながら、研究会とグループの活動を通じて大学やディシプリン、年代や地域を越えた院生間・研究者間のネットワークをつむぎ、さまざまに問題を共有していく取り組みを継続していく所存であるが、そのうえで本稿がさらなる議論の呼び水となることを切に願うばかりである。

参考文献

東浩紀（1998）『存在論的、郵便的――ジャック・デリダについて』新潮社。
ベック・ウルリヒ、スコット・ラッシュ、アンソニー・ギデンズ（1997）『再帰的近代化――近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文ほか訳、而立書房。
遠藤英樹（2017）『ツーリズム・モビリティーズ――観光と移動の社会理論』ミネルヴァ書房。
石野隆美（2021a）「道徳的非難を配慮へと読み替える――COVID-19 とともにある観光者の選択をめぐって」『立命館大学人文科学研究所紀要』125（印刷中）。
石野隆美（2021b）「フィリピン・マニラにおける感染症対策と 2 つの「ホーム」」浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編『パンデミックとともに考える――COVID-19 と人類学』水声社（印刷中）。
萬代伸哉（2020）『バックパッカー 体験の社会学――日本人の若者・学生を事例に』公人の友社。
大野哲也（2012）『旅を生きる人びと――バックパッカーの人類学』世界思想社。
関根康正（2009）「「ストリートの人類学」の提唱――ストリートという縁辺で人類学する」『国立民族学博物館調査報告』80:27-44。
Foucault, M. (2004). *Securité, Territoire, Population: cours au Collège de France* (1977-1978)、Gallimard: Le Seuil（高桑和巳訳『安全・領土・人口――コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978 年度』 筑摩書房、2007 年）。
Jarvis, J. & V. Peel 2010. Flashpacking in Fiji: Reframing the 'global nomad' in a developing destination. In K. Hannam & A. Diekmann eds., *Beyond Backpacker Tourism: Mobilities and Experiences*, Channel View Publications, pp.21-39.
Urry, J. & J. Larsen. 2011. *The Tourist Gaze 3.0*. London: Sage（＝加太宏邦訳『観光のまなざし 増補改訂版』法政大学出版局、2014 年）
Urry, J. 2007. *Mobilities*. Cambridge: Polity Press（＝吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ――移動の社会学』作品社、2015 年）。

注

[1] Facebook 上のプラットフォーム設立にあたっては、遠藤理一氏に相談し、助言をいただいた。

また、本寄稿と特集の企画を快く受け止めてくださった岩本晃典氏と斉藤巧弥氏にも、この場を借りて深く謝意を示したい。

[2] いうまでもなく、各報告者による報告内容の要約と整理の文責は筆者にある。各報告者のすぐれた議論と刺激的な問いかけのすべてを筆者が回収しきれたかどうかはわからないが、それはひとえに筆者の力量不足による。

[3] 2020年3月、筆者がフィリピン・マニラで都市封鎖（lockdown）を経験し、4月初頭に日本に帰国する際、帰国便機内では「健康質問票」や「帰国後の滞在先申告書」が配布された。そこには「入国される方へ検問所からお知らせ」と題された項目があり、入国者は体温測定を毎日実施し、自身の発熱の有無を常に確認するよう要請する文章があった。

[4] Biosecurity and Politics と題されたアガンベンのブログ（D. Alan Dean による英語訳）（https://d-dean.medium.com/biosecurity-and-politics-giorgio-agamben-396f9ab3b6f4　2021年1月28日最終確認）。

[5] ユヴァル・ノア・ハラリが *Financial Times* に寄せた論考（March 20, 2020. The World After Coronavirus. *Financial Times*. https://www.ft.com/content/19d90308-6858-11ea-a3c9-1fe6fedcca75　2021年1月28日最終確認）。

[6] 観光者や感染者に対する犠牲者非難（victim blaming）の問題には、「選択する主体」という近代的個人像の回帰が見受けられる。この点については拙論（石野 2021a）で詳しくまとめた。

[7] 鈴木の発表が触発的な理由のいくつかのうち1つは、もしかしたら私たちはすでに「従来の観光」なるものをノスタルジックに対象化してしまっているかもしれない、という可能性を聞き手に想起させる点にあると筆者は考えている。すなわち、「かつて私たちができていた観光」の様式を懐かしみ、その回復を希求する意志がすでにどこかにあるかもしれない。もちろんこうした発想は、COVID-19 の「以前」と「以後」の断絶を前提とする思考ときわめて近接してしまう危険性があるがゆえに、分析レベルとしてどこまで掘り下げることが可能かどうかはわからない。だが少なくとも、現象レベルにおいては、すでに COVID-19「以前」の観光様式がノスタルジックに眺められている可能性は指摘できるだろう（たとえば「マスクが不要な観光」）。何かするために観光するのではなく、（ずっと我慢していてできなかった）「かつての観光」をするために観光する、という具合にである。その「かつての観光」にどのような様式への希求や観念が含みこまれているか、という点は検討に値すると思われる。

[8] たとえば「あうたび合同会社」によって企画されている国内対象のオンラインツアーでは、地域応援特産品セットをインターネット上で購入することで、その生産者や地域住民と Zoom 画面を通じてコミュニケーションをとることができる（https://autabi.com/tour/ 2021年1月28日最終確認）。また、「即旅（ソクたび）」による「おうちソクたび」は、地域の食材や料理を購入し、それを自宅で調理したり食べたりしながら、ライブ配信される現地の旅動画を視聴し旅行を疑似体験することができるものとなっている（https://ouchi.sokutabi.com/　2021年1月28日最終確認）。ほかにもバスの乗客目線で「移動」を視覚的に感じることができるオンラインバスツアーや、実際に観光地の人力車に乗っている感覚を味わうことができるツアー（人力車会社「いつき屋」（川越）によるサービス https://www.jinrikisha-itsukiya.com/　2021年1月28日最終確認）などもある。

[9] 五感への刺激や、現地の人びととオンラインで交流することができるからこそ生じうる偶然性や「誤配」（東 1998）の可能性までもが準備され、従来の観光を代替すべく設計されているという議論も可能かもしれない。オンラインツアーはたしかにウイルスへの感染や身体的な損傷を被るリスクを持たない。そこではつねに「ホスト」が参加者をまなざしており――それは当然、観光研究において駆り出される図式的役割としての「ホスト」（と「ゲスト」）とは明確に異質である――、オンラインツアーの「シナリオ」を不具合なく進めるための努力がなされている。言い換えれば、規範が存在している。であれば、観光や旅が自然に内包する（と考えられている）「リスク」や偶然性、あるいは東のいう無意識と無意識の直接的なコミュニケーションの機会もまた、準備されている可能性がある。偶然性やスリル、ハプニング、さらには死への恐怖までもがコンテンツとして提示されるさまを想像するとき、私たちはいくつかのことを問うことができるだろう。シナリオへの回収はいかにして避けられるのか（避けるべきなのか）。あえて没入することは台本として、つまり役割と演技として了解されているのか（あるいはどのように）。オンライン上のコミュニケーションがその支えとしている規範自体が、コンテンツとして消費されうる事態はあるのか。といった具合に。

他方で私たちがオンラインでなにがしかを行うときに常に抱える不安、すなわち「PC が落ちた」とか「電波の調子が悪い」といった事態に直面する不安は、組織化されたオンラインツアーの提供側

もまた感じているかもしれない。オンライン上の不測の事態はその意味で「ホスト」にも「ゲスト」にも操作不可能な位置にありうる。だが、オンラインツアーの最中に参加者のPCが落ちたり、画面の向こうにいるべき現地の住民やガイドが予定通り現れなかったり、宅配されてきた食材に不備があったりした場合、私たちはその経験を観光や旅の文脈でいうような偶然性やハプニングとして経験することができるのだろうかという疑問は残る。

10　それぞれの特徴と要素間の関係については、萬代（2020）に詳述されている。

11　登壇者は、清水直哉（株式会社 TABIPPO）、詩歩（『死ぬまでに行きたい！世界の絶景』（三才ブックス）著者）、山下マヌー（旅行作家）、羽石杏奈（プロトラベラー）と、モデレーターの四条理（株式会社ビジョン）であり、「アフター・コロナ」における「これからの旅」のあり方やスタイル、可能性についてZoom上で意見交換がなされた。

12　株式会社マクロミルにより、2020年6月15日から16日の期間で全国20〜69歳の男女を対象に採られた意識調査（https://honote.macromill.com/report/20200709/　2021年1月28日最終確認）。

13　点Pの移動を二次関数で示すにはX軸とY軸からなる座標が必要だが、それが描かれた紙切れを私たちはつまみ、（Z軸方向にすら）移動させることができる。ちなみにその際、私の一方の手は紙をつまんで確かに動くことになるであろうが、私の身体全体が動いているわけではない。ではこのとき、果たして私は移動しているのだろうか。筆者は、モビリティの問題はきわめて人間の主体の根幹にかかわる問題と直結していると考えている。

14　「ホーム」という言葉の流通と美化がはらむ危険性は、関根康正の言い方を借りるならば〈境界〉が〈周縁〉へと再び揺り戻されてしまうところにある（関根 2009）。あるいは、「中心―周辺」の権力構造の再生産に結びつくおそれがある。「ホーム」という安住の場から「ストリート」のホームレスたちをまなざす視線は、彼らを他者として位置づけ自らと距離を保とうとする。それは差別構造と結びついた近代的なホーム・イデオロギーに暗黙のままに加担する共犯者としてのふるまいである。近代イデオロギーとしての「ホーム」がすでに幻想化しているにもかかわらず、ストリートと地続きであることを見て見ぬふりすることで自らを維持しようとする矛盾（「再帰的近代」（ベックほか 1997）あるいは近代の限界問題といってもよい）を突いた関根の議論は、「ホーム」に留まることと「安全」（自身の感染リスクの最小化）とを理想化しながら結びつける今日の「ホーム」言説の流通を批判的に捉えるてがかりになると思われる。〈周縁〉を〈境界〉に読み替える対話的な試みは――まさしくその対話こそが感染の 1 つの原因であるにしても――容易に手放されるべきものではないだろう。

15　筆者は別のところで、フィリピン・マニラにおける感染症対策の文脈であらわれた二重の「ステイホーム」言説について分析した（石野 2021b）。フィリピンではCOVID-19が拡大するなか、医療施設の逼迫と国内医療従事者の不足が深刻な課題として早期からあらわれていた。そこで政府は、感染症の影響で海外から帰国を余儀なくされたフィリピン人の医療従事者たち（海外で働くフィリピン人労働者たちはOFW：Overseas Filipino Workersと総称される）の再出国を禁止し、国内の医療施設での業務に従事するよう働きかけた。その際に言説化されたのが「ステイホーム」なのである。すなわちフィリピンにおける「ステイホーム」は、外出を控え家に留まることを要請すると同時に、フィリピンに留まり国内の苦境に貢献することを人びとに道徳的に要請するものでもあった。